ワンピース 天狐

人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ワンピース　天狐

【Ｎコード】
Ｎ２００２Ｙ

【作者名】
人

【あらすじ】
神（仮）に転生させられ天狐の力をてにいれた人の話です。ここの天狐はほぼ自分のオリジナルです。自分はワンピースをあまり知りません。
処女ですが、よろしくお願いします。

1話

はじめまして、自分の名前は斎藤　たつきです。

いきなりですが、なんか死んだみたいです。（笑）

そこ！そんな可哀想な人を見る目で見るな！だってさ、周り真っ暗なんだもん！あれだよ、ぎん〇まの洞爺湖の仙人の出てきた世界だよ。ベットとかあるしね。

何て考えていたら何か光が来た。

（やっと起きた。お前死ぬはずじゃないのに死んだから転生させる。異論は認めない！まぁがんば！）

え、何これ。なんで穴が空いてるの？待って。誰か説明くれぇぇぇぇぇぇぇ！

2話

さて、何か起きたら森だった。
いやいやいや。ないないない、だってあれだもん俺死んだもん。光がきて落とされたけどいくらたんでもこれはない。そうだ！ない！これは夢だ！そうとなれば寝よ。

ん？なんか紙がある。なになに。

『よ、ちゃんと本文読んでるか？まぁいい。とにかく用件だけ箇条書きでかいてくぞ。

・お前もしってのとうりお前は死んた。赤ん坊に押され津車に轢かれるというドンマイな死にかたで。
・そこはＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　の無人島の一つだ。いちょう紙の近くに悪魔の実をおいといた。
・そこは結構危険な生き物もいるから気を付けろよ？・身体能力は鍛えればその世界最強クラスになるから。
じゃ最後に運命かってにこわしてごめんね（笑）』

「ふ、ふ、ふ、ふざけるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」もっと説明くれ！

じゃいちょう悪魔の実でも食べますか。
まず…。まぁいいや。「とりあえず能力の確認と体術や体きたえなくちゃな。」
そういって森のなかに斎藤は姿を消した。シッポがあることにきずかずに。

3話（前書き）

まさかのＰＶ１２００！ありがとうございます。期待しないで読んでください。

3話

どうも、たつきです。　　あれから五年たち、能力、体術ともにだいぶましになりました。（ちなみに今の歳はたぶん１６歳です。）

悪魔の実の能力は動物系コンコンの実モデル天狐でした。これすごいんですよ！まず人の姿のときは妖術モドキがつかえ、人獣型のときは妖術＋四尾＋千里眼がつかえ、獣型のときは妖術＋四尾＋千里眼＋七色に輝く体毛（一本一本が鋼鉄のように固く、覇気も纏える。）＋神通力。

あれ？最強クラスじゃない？この小説のキーワードの弱チート早くも崩れてない？（メタ反対ぃぃぃぃぃぃ！ｂｙ作者）

今は体毛に覇気（覇王色は持ってないです。）を纏い、それを飛ばせないかなぁと考えています。

ちなみ、原作にはちょくちょく介入しようと思います。

にしても暇だなぁ。何か来ないかな。この島の獣全て手なずけたからなぁ。海賊とかきたら面白いのにな。まぁザコ限定だげど。バギー並の奴がきてほしいな！まったく、本当に最近喋ってないから声がでなくなりそう。

ｓｉｄｅ海賊

くそ！あんな怪物海軍相手に出来るか！

「おい！お前ら！とにかく近くにある島までにげりぞ。そこで水と食料を手にいれ、また逃げるぞ！」

くそ！くそ！こんなはずじゃなかったのに！ただいつも道理町を襲っただけなのに。まさか中将がいるなんて！

「島だぞぉ！」

やっと見つけたか。
「よぉぉし。上陸だ！さっさと水と食料とってこい！」
早くしないとおいつかれてしまう！

ｓｉｄｅ？？？中将

やぁやぁ、わしはガープじゃ。
さっきよった町で海賊が襲ってきたから反撃したらあっさりにげおった。
まったく、歯応えがないのぉ。あんなざこでも懸賞金５００万ベリーだなんてのぉ。
お！島に上陸したな？ふっふっふっ。さっさと捕まえて寝るとするかの！

4話（前書き）

遅くなり申し訳ありません。

文才がなく意味不明になりました。

4話

こんにちは！たつきです！
だだいまめんどくさいことになっています。
「そいつが貴様の言っていた漂流者か、ガープ？」
「おう！なかなかの強さを持っているぞ！センゴク！」
な・ん・でセンゴク元帥の前にいるんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

〜〜回想〜〜

暇だぁ暇だぁ本当にだれか来ないかな。
「……は…ちんたらするな！」
お！誰かきた！さっそく話してこよ！

side　海賊
今はまだ海軍はみえねな。今内に作業するか。
「船長！何かへんなやつがいます！」
「なんだ変なやつって！もっと詳しく話せ！」
「それが、いきなりガキが森から出てきて、口をパクパクしてりんですよ。」
まったくめんどくさいな！
「どうでもいい。殺せ。そんなことより早く作業しろ！」
無駄な時間取らせやがって。

ｓｉｄｅ　たつき

見つけたぁぁぁぁぁ！　　さぁ声かけよ！

「オ……ゥァ」

て声でねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！おいおい勘弁してくれよ。あちらさんなんか怪しんでるよ！ほら、銃取り出して此方向けてるし。アハハハハハ……ゐ？

ガァァァァァン

うぉぉぉぉぉ！本当に打ってきたよ！待とうぜ！此方に敵意はないって！て、そうだ声出ないんだ。まったく、この世界に来て最初に会った人と殺し会うのか。……ｏｒｚ

ｓｉｄｅ　海賊

よし！水と食料は積んだな。さっさと出航だ！　　「おいお前ら！さっさと乗れ！出るぞ！」

「船長！た・た・た・助け下さい！」

「何だ！何があっ…た……」

何だ！あの狐は！尻尾は４本はり体毛は七色に光っている。ありゃ本当に狐か！？

「くそ！全員あれに一斉射撃だ。その内に出航するぞ！」

後ろからは海軍。前にはあの化物。いやだいやだ。まだ死にたくない！

ｓｉｄｅ　たつき

いちよう力試しの為に獣型になったけど……弱っ！え？

銃てこんなにもかるいの？妖術でらくに剣や銃は壊せるし、あたっても痛くない。つまんねぇぇぇぇぇ。
でもまだ人は殺せません。もっぱら気絶してもらっています。
あ、何かでかいの来た。
「オイ！お前俺が『大砲』のガリクと知っているのか！賞金５０００万ベリーだぞ！」
いや獣にそんなこと言っても無駄しょ。しかも足ガタガタなってるしｗｗｗ　返事してやりたいけど声出ないんだ。まぁ気絶してくれや。
「来るな！来るな！来るなぁぁぁぁぁ！」
大砲打ってきたよ！ま、きかないど。ちょっと痛いだけだ。
尻尾で大砲を壊して、はい、終わり！あっけないなぁ。
あれ？もう一隻来る。あれは……海軍！？

ｓｉｄｅ　ガープ

さてと、あのアホに愛の拳骨をくれてやらんとな！
「中将！海岸に海賊たちか倒れています！」
なに！どういうことじゃ？あの島は無人島で猛獣しかいないはずじゃ。
「猛獣はおるか？」
「いえ見当たりません……いや、あれは……中将！男が海賊たちの近くで手を振っています。」
ふむ。漂流者かの。
「よし！あの男のところまでいくぞ！いろいろきかねばならん」

「「「「「はっ！」」」」」

ｓｉｄｅ　たつき

なんか来たなぁ、てあれガープじゃない？ゑ？なんであんな大物がここにいるの！

「お前がこれをやったのか？」

コク

「なぜ声をださん？声がでないのか？」

コク

「お前さん、漂流者か？」

コク（俺みたいな人間はこのほうが妥当だろ）

「わしらはみてのとうり海軍じゃ。わしらについてくるか？」

コクコクコク

「よし！では詳しくは船のなかではなぞ」

はぁやっと人の住んでる場所にいけるのか。

楽しみだな。

やっぱりこのまま海軍に入ってしまうのがいいのかね？でも人は殺せないしなぁ。まぁ成り行きにまかせよ。

元々一部の海賊以外虐殺とかやってそうだしな。よし、がんばっていこう！

5話

said　センゴク

ふむ、ガープの連れてきたこの少年、なかなか強いと言うがどの程度のものか。

「君はいつからあの島にいるのかね？」

「五年間です」

「何故漂流者になったか覚えているのか？」　「スミマセン。記憶がなくて」　ふむ、しかしあの島には猛獣がいたはず……

「あの島には猛獣がいたはずだが？」

「まだ漂流者になったばかりのころに悪魔の実を食べたので生きることができました」

「なんの実だね？」

「コンコンの実モデル天狐です」

なんと！幻獣種か！

「そうか。そうだな……中尉から初めてもらうか。」

こんな時代だ。貴重な人材はしっかり育てなくてはな。

「ただし！お前がめんどうみろよ！ガープ！」

「ワハハ！まかせんかい」

「そういえば名前を聞いていなかったな。名は何て言うんだ？」

said　アウト

said　たつき

こんにちは。いきなり少尉になったたつきです。

まてまてまてまて。　「無茶、な、こと、言わないでください！人獣型、にも、ならず、こんなの、無理です！」

ガープ中将に拳骨流星群くらってます。なんとか教えて貰った

六式の内のなかで覚えた剃と月歩で何とか避けていた。ちなみに、僕は六式全て使えるようになりました。しかし長かった。なんせ６ヶ月、毎日練習したからね。

しかしまだまだ熟練度は低い。もっと練習しなきゃな。

「あ～疲れた！」

「鍛えがたりないんじゃ！」

「誰もあんなの無理ですよ！それこそ大佐並みじゃなきゃ！」

「いや、難しいから……」

この人は、ガープ中将の船で副官をやっている方で、いつもサボる中将のお目付け役だ。かなり強い。が、これでも海軍本部大佐のなかでは弱いほうだという。つまり、人外がたくさんいるんだね。分かります。　「ところで貴様のようじゅつ……といったか、それのバリエーションを増やせ。いくらなんでも少なすぎる。」

「そうだね。タツキ君は六式も使えるようになったし、妖術の種類と六式の熟練度を上げたら、人獣型や獣型にならなくても十分憶並みの海賊とも闘えるよ。」

「そうなんですよね。今は“狐火”と幻術の類いしかないし、幻術も覇気使いにはほぼきかないですしね。なにか案ありませんか」

今は本部の訓練所です。中将がサボっていたので探しに来た僕と大佐が訓練されています。

「しらん！自分で考えろ」

「そうだね。空飛んだり、風や水、土を操れないかな？」

みなさん。今の答えでガープ中将の適当さ分かりましたか？

にしても、空を飛ぶのは妖術の源の妖気を足場にするか。風などは神通力じゃないと無理だと島で分かったからな。うーん。そう

だ！分身作れないかな。

「決まりました。空飛ぶのと分身を作れるようにします。風などを操るのは獣型にならないて無理ですから。」

「そうかいがんばってね？それじゃあ中将書類かたずけましょうか！」

そうだ！そのために来たんだった！

「逃がしませんよ！」

「離せ！」

「嫌です」

人獣型になり逃げようとしていた中将を尻尾でつかむ。

「さぁ楽しい楽しい書類仕事が待ってますよ。」

その日、新たな屍が一つ増えた。合掌。

ま、中将が悪いんだけどね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2002y/

ワンピース 天狐

2011年11月27日02時47分発行